

## 倫子の町

源 桃子

とある小さな町が倫子のふるさとだった。倫子はその町にある二つの小学校のうちの一つ、万葉小学校に通った。その頃実母が病弱だったため叔母のもとに倫子は預けられていた。叔母夫婦には子供がいなかった。小学校のすぐそばに叔母の家があった。叔父と叔母とで文房具から食料品、簡単な衣料品などを商い、二階には常に三名の下宿人が住んでいた。小学校の教員たちで、異動のたびに顔ぶれが入れ替わった。母屋に隣接した別棟では理容室を営んでいた。「近くに散髪屋さんが無いのでやって欲しい」との周囲の要望に応え、叔父が従業員を雇い入れ開店させたのだった。バスの停留所がすぐそばにあったので、遠くからも客があり、店はどちらともが繁盛していた。理容室では若い使用人が三人いて、一人は男性で、ギターの上手い美男だった。女性二人のうち、小柄な方の千代子さんは十八才くらいだった。忙しい叔母に代わって倫子の身の回

りの世話もしてくれていた。千代子さんは何かにつけ口癖のように倫子のことを「倫子ちゃんは幼い」と言っていた。

小学校五年の頃、倫子は放送委員になった。昼休み時間には校長室の隣にあった放送室で倫子は担任の先生Kと一緒に作った原稿を読み上げた。

叔父叔母は昼休みに流れてくる倫子の声を聴くのを楽しみにしていた。

小学校の裏にはお寺があった。おそらく万葉小学校は昔、寺子屋であったのであろう。学校の階段の踊り場からは墓地が見えた。倫子はなるべく窓の方を見ないようにしていた。まだまだ土葬の時代で、その踊り場の窓に喪服を着た人や風呂桶のようなお棺を担ぐ光景が映る時は怖さを感じた。墓地は斜面に広がっていた。

お寺の境内で目にしたことと異様だったことの一つは、お棺を担ぎながらその境内をぐるぐると回るというものだった。参列者はカラフルな色紙で作った飾りを竹に巻いたようなものを銘々手にしていた。

担任の教師のKはスパー・カブというホンダのバイクに乗っていた。放課後になると倫子に乗せて校庭を走った。時には倫子にハンドルを握らせ、自らは倫

子を抱えるように座った。またある時は校庭の花壇を飾るための花の苗を買うのに、倫子をバイクに乗せ、街へと駆った。バイクがエンストをおこしたことがあった。暮れかかった切り通しでエンジンがかかるまでの時間を、倫子は林に入り、野草やきのこを探すのに費やした。通りがかりの人たちは若いKに親切で、エンジンが起動すると共によるこんでくれた。倫子の持ち帰った野草やきのこを叔母は珍しそうに見ていたが、食毒を疑う様子もなく天ぷらや汁の具材にしてくれた。何かと倫子はKの『ぱしり』役を担った。学校のすぐ傍から通学していた事が何よりの理由だった。千代子さんからは幼いと言われていたが倫子はよく気の付く少女だった。

昭和三〇年代の終わりの頃と言えば、第二次世界大戦が終息し、戦争の遺物らしきものを目にするのではなく、倫子の町にも活気がみなぎっていた。しかしその一方でニュースはベトナム戦争の惨状を伝えていた『コンバット』という米国のドラマが、実録さながらの迫力を以て映し出されるテレビに大人も子供も夢中になった。

学校教育の現場ではその頃、今ではおおよそ想像もつかないようなことが展開されてもいた。

今と違って男性の教員には宿直というのがあった。それは日曜日以外に夏休みにもあって、Kは女子児童を数人、補習授業の名目で泊まらせたりしていた。ある年の夏休み明けのもっぱらの話題はそのことであつた。今なら懲戒免職ものに相違ない。

倫子はそのうちでKに声を掛けられたことは無かつた。

男の子たちがニヤニヤしていたぐらいで、何も問題にはならなかつた。そのことが教室から外に漏れることはなかつた。それどころかKは「先生様」などと父母から呼ばれていた。

Kは、ある大農家の家に下宿していた。その農家は四世代が住み、全員がKのことを「先生様」と呼んでいた。

ある新学期のクラスでKは、自分の下宿先の娘、典子ちゃんを学級委員にすることを典子ちゃんの両親に約束していた。話をその方向に持って行くとするKに対し、投票で決めるものと思っていた児童らが不満そうな態度をしたため、Kはそのうちの三名を立たせた。そして典子ちゃんを学級委員にさせたくない理由を聞いたのだした。

三人共が赤面し黙りこくつた。Kは三人をそれぞれ

に水を入れたバケツを持たせ廊下に立たせた。

結局、学級委員は従来の投票でバケツを持つて立たされた男の子の一人と倫子になった。

万葉小学校の中庭には大きな井戸があった。そこで『小使いさん』が、ガツチャンポンプでバケツに水を汲んでいた。授業の始まることをしらせる予鈴を鳴らすのも小使いさんの役目だった。真鍮製の鐘だった。アイスキャンデーを売る人の鳴らす鐘と同じだった。

ある秋のこと、「倫子はオデット姫だぞ」と担任のKに言われ、倫子は戸惑った。

学芸発表会で白鳥の湖のオデット姫の役をやれと言うのだ。叔母にそのための衣装を用意して欲しいなどと倫子には言い出せなかった。叔母は子供を育てたことは無かったし、時間があればお琴を弾いたり俳句を詠んだりしていたので、倫子は自分と叔母の間に、ある距離を感じていたのだった。それにその頃、叔母があることに悩んでいたのを、倫子は子供ながらに感じていた。

別棟の理容室で働いていた理容師のMに叔母は熱烈に恋をされてしまっていた。母屋から理容室に続く廊下でMが叔母に囁きかける様子を倫子は見ることがあ

った。Mは叔母よりも若い千代子さんたちには関心が無いようだった。夕食が終わると弾き始めるMのギターは叔母に聴かせるものだったのかも知れないと倫子は思った。叔母はお琴を二面、床の間に掛けていた。

時折、その二面を並べ、倫子に易しい曲を稽古させようとした。八畳の和室は斜めに並べられたお琴で占領された。倫子は叔母に伝えたい気持ちはあるけれども、その時間ほど苦痛な時間は無かった。お琴の扱い方から、琴柱の立て方、調律などなど、それより何より立ち居振る舞いが難儀だった。「幼い」と千代子さんに言われていた倫子は、山できのこをさがしたり川で魚を掬ったりするほうが好きだった。叔母はそんな倫子の居ずまいを正そうと思ったのだったが倫子はお琴を弾くよりむしろMのギターの方に関心があった。虚無感を漂わせていたMは、若くして交通事故で亡くなった米国の俳優、ジェームス・ディーンを意識していたようで、髪型もそっくりだった。

叔父は何も気づいていないようだった。叔父は詩吟に夢中で、自室の壁に賞状が増えていくのを生き甲斐のようにしていた。

叔父は細面で白人のような面立ちだった。この叔父と富士額の叔母の間に子供がいたとしたらどんなにか

美しい顔をしていただろうと倫子は思った。

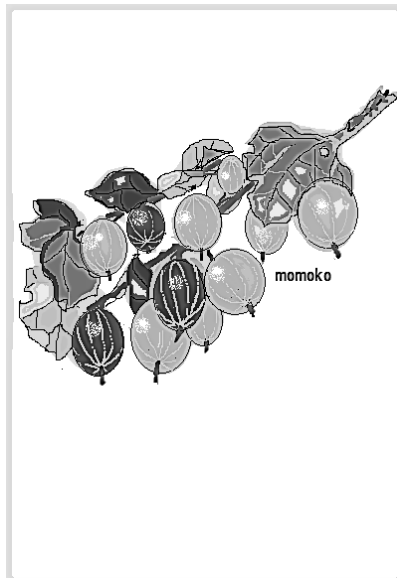
発表会でチュチュを着ることになったことを倫子は住み込みの千代子さんに相談した。「倫子ちゃんは幼い」が口癖の千代子さんは目を丸くした。ずんぐりむつくりで鈍そうな倫子と白鳥の湖は結びつかなかったようだった。王子のジークフリート役は長身の光ちゃんだった。光ちゃんは美形の女子だった。彼女こそオデットに相応しかったのだが、クラスで一番長身だったためジークフリートにさせられたのかもしれない。男の子たちは演技ではなく、器楽の演奏の役に回された。倫子は千代子さんの用意してくれたチュチュを着け、金銀の色紙を貼って作られたティアラを被り、白いストッキングを履き、湖の畔で花を摘んだ。

学芸発表会は無事済んだのだが、叔母とMの関係は凄絶を極めた。冷たいだけの叔母の態度に激したMが叔母を切りつけたのだった。叔母はそのあとしばらく親戚の家に身を寄せた。それ以来Mの消息を知ることとは無かった。深手を負った叔母と叔父の関係はぎくしゃくし、叔母はそれまでよりも無口になってしまった。

理容室の外壁に近い庭に『すぐり』の木があった。

濃い緑色から黄緑色へ、そして朱色、赤へと変わる過程を見るのが倫子には楽しみだった。

実には僅かに縦縞模様があった。赤く熟しても狭い場所にあったので採って食べる者がいないので倫子が独り占め出来た。やや酸味を帯びたすぐりは叔母とMの事件とともにその時代の忘れられない味となった。



（すぐり）

孤独な雰囲気を湛えながらギターを掻き鳴らしていたMにどんな咎めがあったのかを倫子は聞かされなかった。

叔母には生活臭というものが無かった。食料品を商っていたので食卓には半加工品に手を加えた副菜が並ぶ。同じ姉妹でも、何でも手作りする叔母の姉である入院中の母とはちがっていた。叔母はトマトケチャップが好きだった。ある日の食卓で炒り卵にトマトケチャップをかけ過ぎたことが原因で吐いてしまい、それからというもの倫子はトマトケチャップが嫌いになっってしまった。叔母は倫子の前ではトマトケチャップを出さなくなった。

Mの去ったあとの理容室は、十年近く、千代子さんと通いの女性とで切り盛りをしていたが、比較的近くに理容院ができたのと千代子さんの縁談を機に閉店となった。

小さな町だったが週刊誌の記者が喜ぶような事件は決して少なくなかった。

隣のクラス的美恵子ちゃんの父親には奥さんが二人いて一緒に暮らしていたが奇妙な家族関係が五年ほど続いた後、本妻さんの方が庭の井戸で変死を遂げた。

しかし事件化することもなく本妻さんの死は闇に葬られた。美恵子ちゃんの母親は二号さんだったと倫子はその時知った。やがて美恵子ちゃんの父親の会社は倒

産した。その後、リヤカーで屑を集めて歩く美恵子ちゃんの両親の姿が隣の町にあった。皆が生きるのに一生懸命だったことは事実であった。

ある学期の初めに担任の教師Kは児童五名を集め、その地域の暮らしを調べ、全市町村立小学校に於ける研究発表会で発表することになったことを告げた。そのメンバーの中には倫子もいた。倫子にとってそれはある意味で好い機会でもあった。クラスの中に気になる男の子が一人いて、その子もそのメンバーに加えられるていたからであった。

その男の子、三郎ちゃんはいつも坊主頭で全体に身体が黒っぽかった。畑の中の不思議な家に住んでいた。周りはトタン板で囲われ、生活の様子はまったく想像が出来なかった。とても静かに暮らしているようだった。

それまでほとんど話をしたことの無かった三郎ちゃんと倫子だったが、子どもなりににも研究発表会に向かつて真剣に資料集めなどに奔走した。担任Kはほとんど口出しをしなかった。距離をおいて子どもたちの様子を見守っているように見えた。

そのことがきっかけとなったのか、無口だった三郎

ちゃんはとても饒舌になった。三郎ちゃんには次郎という五才上の兄がいるとのことだった。

三郎ちゃんの家のそばには電信柱が無かった。子どもながらに倫子は、三郎ちゃんの家は、夜は暗いだろかなと思つたが、その事を尋ねることもしなかつた。

発表会は無事に終わった。グラフを描いた模造紙を前にして、緊張のあまり言葉が出て来ず、十五秒ほど沈黙してしまつた倫子を除いて、あとの四名は難なく自分の役割を果たした。特に三郎ちゃんの発表は落ちて着いていた。楽屋に戻ると、全員に茶色の小さな包みが届いていた。明治の板チョコだった。倫子の父からだった。会場のどこかで倫子の父は娘と緊張感を共にしていたのであつた。恥ずかしさと申し訳なさで苦い板チョコは一層苦く感じられた。

その年の秋の、馬頭観世音の碑の建つ田んぼのあぜ道に三郎ちゃんがいた。イナゴを捕っていた。発表会以来すつかり親しくなつていた倫子は、三郎ちゃんのために稲の中に潜むイナゴを捕るのを手伝つた。三郎ちゃんは巨大な捕虫網を持つていた。あぜ道に置かれた三郎ちゃんの幾つもの袋はイナゴで満たされた。

その頃、万葉小学校ではイナゴを売つてドッジボールを買おうという運動が始まつていたのであつたが、三

郎ちゃんは佃煮にするので親に頼まれたと言つていた。その町はイナゴを捕るには格好の土地柄であつた。農薬云々の以前の時代であつた。のちのち、米の品種改良等で名を馳せることになる学者を輩出させたほど、その町は米どころとして有名であつた。佃煮にするにはあまりにも大量のイナゴを、来る日も来る日も持ち帰る三郎ちゃんの家ではイナゴをどこかに売つていたようだった。

冬休みを前にしたある日、教室のだるまストーブを囲む円陣の中に、三郎ちゃんの満面の笑みがあつた。どうやら三郎ちゃんは転校するらしいのだ。笑顔でいるのは三郎ちゃん一人で、他は複雑な顔をしていた。「テレビだつてあるんだよ。冬は寒いけど家の中には電気ストーブもあるし、風呂もあるんだ…。何だつてあるんだよ」

そうして冬休み明けの教室から三郎ちゃんの姿は消えた。

三郎ちゃん一家は韓国から来た人たちだつたと、食事の席で叔父叔母が話してることがあつた。

トタン板で囲まれていた何軒かの集落の中にあつた三郎ちゃんの家は解体されてしまつていた。家の形が

なくなると小さな空き地が出来た。

時々行方不明になっていた犬はかなりの数にのぼった。それは韓国人の人たちの貴重なたんぱく源となっていた事を知った時、倫子は慟哭した。その中には倫子の愛犬リリーもいた。そのことを責めることの出来ない時代であった。

井戸で変死をとげた美恵子ちゃんの父親の本妻のことについて、買い物に来た客が叔母を相手に店内で話しているのを、倫子はとろてんを食べながら聞いていた。

美恵子ちゃんの父親というのは亡くなった本妻の婿だった。もともとは本妻の両親が起業した精密機械の会社を娘夫婦が継いだのだった。やがて両親が相次いで亡くなり、美恵子ちゃんの父親は遊興にふけるようになった。子どもが出来なかつた事もあつてなのか、外に妾を囲うようにもなつた。それが美恵子ちゃんの母親である。やがて妾を連れてきて妻妾同居の暮らしが始まつた。程なくして美恵子ちゃんが産声をあげた。先代の死後、会社の実権は、当初は本妻の方が握っていたが、婿である夫が事実上の実権を握るようになるまでそれほど時間は要しなかつた。

若い妾は妻の座が欲しかった。本妻にとつては地獄のような生活だったことは想像に難くない。周囲が羨望するような大きな家に住み、文化的な暮らしはしていても途中から入ってきた女に台所も占領され、妾の娘からは「おばちゃん」と呼ばれ、本妻の居場所は何処だったのだらうか、頼りにする人は誰だったのだらうかと思ひながら、客と叔母との話を倫子は聞いていた。

韓国人の部落という言葉が客の口から出てきたので倫子に緊張が走つた。どうやら何軒かあつた朝鮮人の居住区の中、でも三郎ちゃんの父親の話のようだった。

一家は芹やきのこ、いなご、鮎などを行商していたようだった。一家の一番のお得意さんは美恵子ちゃんの家のおばちゃんだったそうである。

おばちゃんはそれらを業者者に依頼して加工し、従業員や近所に配っていたのだった。週に一度イナゴや山菜などを売りに来る三郎ちゃん一家の礼儀の正しさや謙虚な態度に、おばちゃんは安らぎを感じていたのだつた。

やがておばちゃんは一家のために大きな決断を下した。親譲りの財産のうち、預貯金のうちのかなりの額を三郎ちゃんの父親に渡すというものである。おばち

やんはあまり外出をせずに暮らしていたのだったが、三郎ちゃんの両親にその事を持ちかけるその日は正装に近い出で立ちで出かけた。

おばちゃんには親しくしている幼なじみの女友達S女がいた。中学校の英語の教師と神主を両立させていたS女は独身を貫いていた。その家へとおばちゃんは向かったのである。事情がよく飲み込めないままの三郎ちゃんの両親であったが、日頃から世話になっている人の呼び出しなので快諾し、おばちゃんに言われたとおりS女の家へと向かった。

S女の家にはかつて芝犬のラッキーがいた。その愛犬ラッキーもまた朝鮮人に連れ去られていた。トタン板で囲まれた家の中の暮らしはそれほど凄絶を極めていたのであった。ラッキーは倫子の愛犬リリーの産んだ子犬だった。

おばちゃんはS女に、三郎ちゃんの両親が着く前に封筒を手渡した。そしてS女立ち会いのもと、もう一つの封筒を三郎ちゃんの両親に差し出した。

こうしておばちゃんは、不動産以外の財産の殆どをS女と三郎ちゃん一家に分与した。

三郎ちゃんには長男であるもう一人の兄と妹がいた。四人きょうだいのうち二人が栄養不良のために亡くな

っていたのだった。

それから間もなくおばちゃんは自宅の庭の井戸で生涯を閉じた。自らの意志だったと誰もが疑わなかったが、もしそれが覚悟の死であったのなら、おばちゃんは身辺の整理を済ましていたはずだがそうではなかった。そのことについて真相が明らかにされることはなかった。

お金持ちではなくなったおばちゃんが暮らして行くことを拒む何かがあったのではないかという類いの事を、おばちゃんをよく知る人たちは話していた。

三郎ちゃんは三学期の始業式を待たずに両親と兄との四人で母国韓国へと発つことになった。

倫子はさようならの挨拶もなく三郎ちゃんがいなくなるのが信じられなかった。だが実際に始業式に三郎ちゃんの姿は無かった。

その三郎ちゃんが始業式後の日曜日の朝、倫子の住む叔父叔母の店に買い物に来たので倫子は腰を抜かすほどびっくりした。

引き戸が開くのと同時に、「モース（申す）」と、語尾を上げた大きな声で入って来たのは紛れもなく三郎ちゃんだった。



三郎ちゃんはそれまでよりずっとこざっぱりして色も白くなっていた。爪もきれいだった。以前にも三郎ちゃんが店に来たことがあった。「モース」と語尾を上げて。掌に一円玉を二つ握っていた。ガラスの容器から、ザラメをまぶした大きなあめ玉を一個取り出し、ギザギザのついた白い小さな紙袋に入れて叔母が手渡していた。あの時、叔母の背後に立つ倫子を見て三郎ちゃんは不思議そうにしていたものだった。

その頃とはまったく違う三郎ちゃんが、鳩に豆鉄砲の倫子を前に、柔和な顔でS女に頼まれた食料を探していた。

三郎ちゃんはS女の養子となっていた。実の親とは離れて暮らす身という共通点を以て倫子と三郎の三期が始まった。

三郎ちゃんはS女をとて慈しんだ。両親の恩人であるおばちゃんとS女を同一視しているかのようだった。

年に一度、お祭りの時に能が奉納される際には袴を着け、忙しく働くS女を助けた。

中学を卒業すると三郎ちゃんは町を出た。そのまま神学科のある大学の付属高校へと進み、そのままそ

の大学へと進んだ。立派な神主になった三郎ちゃんが町に帰って来た。三郎ちゃんは中学の国語の教師の免許も持って帰っていた。三郎ちゃんは町に戻るなり両親の恩人であるおばちゃんのために神社の一隅に碑を建てた。

三郎ちゃんは両親の住む韓国を訪ねることはなかったが、S女の計らいで兄は時折日本に来ることができた。

三郎ちゃんは、白鳥の湖でジークフリート役だった光ちゃんと結婚した。

倫子は手に職があったほうがいいとの叔父叔母の勧めで看護学校に進んだ。だが、解剖の授業で嘔吐を繰り返したり失神したりで退学することになった。

倫子の実母は長い闘病生活の果て、肝臓の機能が低下し、五十才で亡くなった。

はたちの成人式を機に倫子は叔父叔母の籍に入った。

倫子の町はこれといった産業のない町ではあったが、反ってそれがその後巨大な産業を興す要因となり、町は人口も増え、右上がりの発展を遂げることとなった。

叔父をそして叔母を看取った倫子は世に言うところ

の婚期をやり過ぎしてしまっていた。

叔父叔母の死後、倫子はいつかKのバイクで走ったあの切り通しに近い山林を買って拓き、宿舎を併設したアトリエを建てた。

周囲の緑と響き合うパステル調の建物は森の中にとけ込みながらも異彩を放つものであった。アーティストの卵は県内の者だけにとどまらなかった。

かつての埃っぽかった切り通しの道は舗装され、海辺の大きな観光地へと続く幹線となった。馬頭観世音の碑の建つあのあぜ道は秋になると真っ赤な彼岸花を咲かせるが、大きな捕虫網をもって田んぼを駆ける少年はいない。

『ヴィラ・アトリエ』と名付けたアーティストのための施設に、倫子はさらにレストランとプチホテルを増設した。レストランとホテルにはそれぞれに即売コーナーを設け、アーティストたちの作品や地場の作物を並べた。

同級生たちの結婚式に呼ばれるたびに倫子は笑顔で臨んだ。結婚というものは先ず出会いがなければ成り立たないのに、倫子には出会いがなかった。周囲に世話やきもいなかった。男女ともこんな風に何となく婚

期を逸してしまふ人たちがいるものだと思つた。それよりも漠然と描いていた夢が少しずつ実現していくことが倫子を孤独から遠ざけた。

叔父叔母の遺産を倫子は有効に使つた。万葉小学校近くの広い土地は一部を残し売却した。

倫子にはまだ叶えたいことがあつた。

町が近代化の道を迎える一方、路地裏で食べ物を乞う人たちがいるという現実があつた。町を挙げてのお祭りの日などは、缶詰の空き缶を前に跪いて小銭を乞う人もいた。その人は腰に藁をよじつた縄を巻いていた。褐色の皮膚は何日も入浴していかないからなのだ。周囲の視線よりも生きることに必死なのだ。

何かの理由で家族から離れ、仕事も希望も失つたままで、立ち上がれないでいる人たちのために何かをしたいと倫子は考えていた。

万葉小学校近くに売却せずに一部だけ残した土地に『ヴィラ・アトリエ』の関連施設を建てるのが倫子の叶えたいもう一つのことであつた。パステル調の建物をコンパクトにしたものを三棟建て、一つをギャラリー、もう一つをシャワー室、そしてもう一つはお洒落なトイレに。ギャラリー以外は男女別するという案

だった。

小学校前の新企画をどうにか実現しようと倫子は走った。町内に大都市から進出して企業に広告を掛け合ったところ倫子の主旨に大いに賛同し、三つの建物の内部に設ける鏡を提供してくれることになった。

その会社に話した倫子の主旨とは、シャワーとトイレを設置し町で物を乞う人たちに心地よく過ごしてもらい、希望を持って生きるための助けになりたいというものだった。

一つの町に定住しているわけではないその人たちとの接触が最も難関で、そこを突破すると話は速かった。

その大きな会社の施設課でその人たちの全体の九割に当たる二十七名を雇い入れてもらえることになった。

そのための保証人探しに、あらゆるつてを手繰って倫子は走った。倫子自身も保証人に名を連ねた。埋もれていた戸籍を掘り起こすと彼らに生気がよみがえった。何年も呼ばれたことのなかった自分の名前を呼ばれた時は涙が出たとある人が言う。

身体を洗い、髪を整えると彼らの本当の顔が現れた。

社員寮を用意された彼らには、小学校前のシャワーームは無用になったかに見えたが、思いがけずスポーツで汗をかいた後の主婦らに好評であった。シャワ

ームを出るとパウダールームというところが女性向きでもあったのだ。その施設の管理には倫子自らがあたった。公共性の高い施設であるということを鑑み、町立の施設にしてはどの動きになった。しかし、倫子のスポンサーを買って出てくれた企業が全面的な協力を申し出てくれ、管理の面でも人員を送ってくれた。ギャラリーはその企業のアンテナショップも兼ねるということでもそれなりの効果も得られた。

倫子は三十八才のときに出会った男と結婚した。倫子は子供が欲しかった。四十三才のその男は倫子の籍に入った。程なくして倫子は妊娠した。その男には家族がいなかった。その男は『ヴィラ・アトリエ』に住んでいた。陶芸に心血を注いでいた。

しかし子供の産声を聞くことも、入院を目の前にしたある日、倫子は廊下で転倒し、救急車で運ばれた。

臨月を迎えていたので子供は帝王切開で無事に産声をあげることができた。丸々とした元気な女の子だった。三つの夢を叶えた倫子は、母校の万葉小学校の裏の墓地に叔父叔母と共に眠っている。

(完)